

令和7年07月12日  
(2025)印刷  
モリタ印刷工業(株)

## 群馬地名だより

群馬地名研究会 会報

## 『宿・町』が付く小字名から

## 宿場地割の起源を探る

原 眞

## ■はじめに

筆者は、現在進行中の『新編桐生市史』調査員として、主に中世城館跡を担当している。それに伴い、地元に残る古文書類の調査を開始。その成果の一つとして、図1に示す大字山上の明治九年作成「上野国勢多郡山上村五拾二字絵図」（桐生市新里町山上区有文書）と、図2年代不詳「上州勢多郡山上」絵図（桐生市新里町大字山上 長沢勝家文書）が確認された。

前者には、中世における在地領主である山上氏の居城とされる山上城跡の輪郭が示され、その東南域には一直線に南北に延びる道とともに、整然と区画された敷地が道を挟んだ両側に並ぶ形で示されている。また、谷を隔てた東方にも逆「T」字状に道路が直線状に描かれていて、箇所も見られ、そこでも同じように整然と区画された敷地が連なる形で描かれている。

後者の絵図には、その逆「T」字状エリアの出入り口となる3箇所それぞれに木戸門（柵）が配され、高札場まで描かれており、まるで近世の宿場町を思わせる。

そこで、こうした地区の地名に注目すると、前者の山上城東南域の地割りについての小字名は「元町」「三町南」とあり、後者については南北道を境に「町西」「町東」と表記されている。この時点で改めて、「町」といった機能を表わす表記が地名

として成立する背景についての疑問を抱くようになったのである。

## ■地割りからのアプローチ

図1を詳しく見ると、山上城の南を東西に走る道は「大胡道」で、その名の通り西方に向かうと大胡城下へと至る。逆に東方に向かうと、逆「T」字状を呈する東西道に直結し、さらに大間々へと向かう「大間々道」である。

膳城の地籍図である。いずれも同じように直線状の道路が城の周囲に配置され、それぞれ道を境に左右ともに整然とした地割が見られるのである。

ここで扱う事例の内、山上城を含めた3城はいずれも小田原北条氏滅亡と同時に廃城になっている。こうしたことを素直に解釈すると、山上城に見られる問題の地割りは、武田氏滅亡後の北条氏時代に企画されたとする考えも可能であろう。

一方、山上城の西方から城の南を通る「大胡道」を見ると、図2の方が分かりやすく描かれており、それを参考にすると、城内常広寺より南に延びる道と「T」字に交差、その道を北に曲がり、さらに東に曲がるといった複雑な経路をたどるといった形で宿場を思わせるエリアに辿り着く。しかし、ここで東西に走る道を見